

(続紙 1)

京都大学	博士 (教育学)	氏名	大 西 正 倫
論文題目	表現的生命の教育哲学 —木村素衛の教育思想—		
(論文内容の要旨)			
<p>著者は本論文で、木村素衛の教育思想の全体を包括的に検討し、その突然の死によって途絶した思索の全体をその可能性を含めて批判的内在的に再構成することを試みている。木村は、西田幾多郎の絶対無の哲学を基盤に、ドイツ観念論の超出をめざして、「一打の鑿」という着想と「表現愛」という原理からなる独特の思想を構成した。本論文は、木村の教育思想の原理論的構成について論ずる前半(第Ⅰ部、第Ⅱ部)、さらに、その発展的再構成をめざす後半(第Ⅲ部)からなる。</p>			
<u>木村の教育思想の原理的構成</u>			
<p>第Ⅰ部では、木村理論の基本構造(著者の言葉で言えば「骨格」、「図式」、「マトリックス」)について論じ、第Ⅱ部では、この基本構造を構成する主要な基礎的諸概念と主題(表現と自覚、表現的世界の構造、国民教育の存立構造、表現愛の構造)について論じた。</p>			
<p>木村を原理的な思索へと向かわせた駆動力は、個的主体の意志の自由を確立しようとする志向性であった。そのためにかれは、絶対無の哲学と固有の表現論に拠って、ドイツ観念論の目的論的決定論に対抗した。そのさなかに、木村は、美学から教育学への転身を強いられた。木村にとって、教育学はさしあたって「憂鬱の塊り」でしかなく、かれは大いに「苦悶」した。しかし、この苦悶の解決の仕方が、かえってかれに独特の教育学をもたらしたと考えることができる。</p>			
<p>木村にあって「表現」とは、制作と実践の区別をこえたポイエシス=プラクシスである。表現と自覚とは、別個の事柄ではない。表現は、表現する個的主体の自覚であり、表現的生命そのものの自覚でもあるからである。表現的生命は、非実体的な具体的普遍ないし絶対的ノエシスとしての「絶対無」であり、それ自体が表現的自覚的存在であり、個的主体はその自覚点である。木村の存在把握と思考には、〈普遍的媒介と個的媒介との相即的相互媒介の連関構造〉という基本的な発想がある。個的主体にとっては、普遍的媒介を自覚することによって実践的自由が確保され、個的媒介を自覚することによって我と汝の意識が成立する。</p>			
<p>ドイツ観念論の「自然」は形成の素材であるにすぎないが、木村はこれを、「我」に呼びかけ・そそのかす「汝的外」ないし「客観的精神」ととらえなおした。形成・表現は、汝的外からの呼びかけに応える私の応答である。形成の応答性は、教育の基本的な特質でもある。</p>			
<p>汝的外、歴史的な自然、表現的な宇宙・天地へと広がる表現的世界は、人間の成すことを含みつつ「成って行く」。文化は、歴史的な自然という全体的媒介連関において「天地の化育を賛ける」のであり、さらに教育は、文化を生み出す主体を育てる「天地の化育を賛けるものを賛け育成する」営みである。歴史的な自然もまた表現的生命であり、具体的普遍としての絶対無である。</p>			

(続紙 2)

木村の形成・表現論を支える根本原理は、「表現愛」である。表現愛とは、アガペの弁証法的自己媒介による具体的な絶対愛であり、個的主体は、エロスの努力をとおしてこのような先験的構造としての表現愛の世界構造を生き、これを自覚する。個的主体は、自覚する表現愛の自覚点である。

木村の教育思想の発展的再構成

木村は、一方で「美」の本質と構造を探究し、他方で「愛」を熱く説いた「美と愛」の教育哲学者として、語り継がれている。しかし「教育愛」は、当時の常套的な論題でもある。木村の教育愛論の固有性は、かれに固有の表現愛の立場から、その特殊化・一つの限定として教育愛を論じたところに、見出されなければならない。木村の教育愛論は、表現愛の具体的展開であるはずだが、この固有性は、年が経つにつれて木村の議論のなかで次第に薄れていき、ただ〈アガペの担い手としての教師〉という立論のみが目立ってくる。木村に固有の表現愛の立場からすれば、教育愛は、次のように論じられるはずである。すなわち、教師は、エロスの存在であり、表現としての形成の進行にともなって次々に生成するアイデアの実現に、そのつどに努める。このような教師は、子どもをも同様のエロスの存在として受け止め、「一切がすでに救われている」表現愛の世界を信頼し、日々のエロスの形成に邁進するのである。

次に、木村の論には、教育を天地の化育の歴史的形成作用として把握する方向と個的主体の形成・表現として捉える方向の二つが、認められる。しかし、木村においては、後者の議論は、かなり不徹底である。木村が本来とらえるはずであった教育は、子どもの「表現」ないし「いのちの成長」を目的とし、表現的自覚を方法原理として、我と汝の表現的交渉の形をとる〈媒介連関〉であり、〈生成するアイデアに駆動される生成する教育〉であると、考えることができる。

絶対無の存在論に立つ木村の論にあっては、個と普遍の双方から実体性が払拭されており、しかも自我の実体性は、表現活動のただなかに「空ぜられる」。教育は、実体的自我の属性を増強する営みではない。教育の成果は、世界に於いて在る自己の開けとしてもたらされ、境位として感得される。学校教育の教科に代表される通常の教育を「〈実〉への教育」と性格づけるとすれば、これに対して木村素衛の教育観は、「〈空〉への教育」と特徴づけることができる。

木村の教育学は、「メタ教育学」であり、教育を構成するわれわれ自身の眼差しに対し、否応なくその前提の吟味を強い、教育をその存在論的な深みから捉え返させる。このように理解されるとき、はじめて、木村教育学の意義は明らかになるのである。

注) 論文内容の要旨と論文審査の結果の要旨は1頁を38字×36行で作成し、合わせて、3,000字を標準とすること。

論文内容の要旨を英語で記入するときは、400～1,100 wordsで作成し審査結果の要旨は日本語500～2,000字程度で作成すること。

(続紙 3)

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、木村素衛の教育思想に関する包括的な研究である。周到な文献探索によって、木村の思想がその基軸と骨格からまるごとに捉えられ、さらに立ち入ってその教育思想の特質と含意が具体的に取り出され、包括的な像が一その可能性を含めて一全体的かつ整合的に描き出されている。

木村素衛は、西田哲学を基盤として、ドイツ観念論を批判的に超出することをめざした。つまり、人間の意志の自由を確立すべく、絶対無の哲学に拠って目的論的決定論と戦うことが、木村の理論構築の初期テーマであり、思索の根源的動因であった。この初期テーマは、「意志の自由」から徐々に「解脱の自由」へと転換したが、この変化にかかわらず、木村教育学の基盤は、一貫して絶対無の存在論にあり、その理論は、西田哲学と仏教によって支えられた。教育思想の多くは、一定の形而上学ないし存在論を前提しており、たとえば今日の学校教育とそれに依拠する教育思想は、〈実体—属性〉図式に立っている。これに対して、木村の教育学は、絶対無の存在論に拠る〈空への教育〉論である。木村の教育学の立ち上げ方、教育の構成の仕方そのものは、教育学一般のそれとは大きく異なっており、木村教育学自体が、教育学の相対化を強いるメタ教育学の意味をもっている。木村の教育学のもつこのダイナミックな意義を明らかにしたことは、本論文の功績である。

本論文では、木村素衛の教育学の基本的な骨格やマトリックスばかりではなく、それを具体的に構成する諸要件についても、周到な考察がなされている。これらの諸要件とは、「非実体的な具体的普遍」(つまり「弁証法的自己媒介」)としての「絶対無」・「表現愛」であり、個的主体をそそのかす「汝的外」・「客観的精神」・「教材」であり、(凝固し固定されて各人を実現への努力へと拘束する「アイデア」ではなく)「鑿の一打一打」によってそのつどに開かれ「生成するアイデア」であり、「パイース」(生徒)と「パイダゴウゴス」(教師)を「二つの焦点とする人間学」であり、「我と汝」の「表現的交渉」である。これらについての徹底した検討によって、木村教育学の包括的な全体像が、具体的に示された。

木村は、教育を〈パイースの「いのちの成長」を目的とし、表現的自覚を方法原理とし、「我と汝」の表現的交渉の形態をとる、媒介連関)として、すなわち〈生成するアイデアを核とする生成する教育)として、把握した。この具体的な包括像を参照することによって、木村教育学を、それを包摂する教育の原理論的展開の全体的文脈のうちに正当に位置づけ議論することが、可能となった。たとえば、この全体像を参照しつつ、京都学派に由来する教育学の広がりをもたどることも可能となる。京都学派教育学の展開への木村教育学の位置づけについては、本論でもすでに多くの端緒的試みがなされている。しかし、これはなお、著者と我々の今後に残された大切な理論的課題の一つである。

本研究は、著者の三十年にも及ぶ木村素衛に関する理論的研鑽の成果であり、その膨大な叙述量、徹底的な論の突き詰め方、周到な文献探索など、ただただ圧倒的である。ちなみに、巻末に綴じられた「文献目録」などは、総計四十二頁にも及んでいる。文中では、問いの形の文章が繰り返され、そのつど問いに関連する文献が広く参照され、議論がまとめられる。こうして、木村の生きた思想がまるごとにつかまれていく。ここには、思想研究の一つのモデルが提示されていると見て良い。

木村素衛に関する先行研究は、今日に至ってもなお、さほど多くはない。しかもそれらは総じて、包括性と徹底性を欠いている。本論文によって、著者は、徹底的で包括的な木村素衛研究を達成し、当分の間、誰もたやすくは到達できないであろうような木村研究の高度な基準を作り上げた。この点について、高く評価することができる。

もちろん、本研究には、なおいくつかの課題が残されている。著者自身が指摘しているように、たとえば木村の国民教育論に関連して、〈普遍的媒介と個的媒介との相即的相互媒介の連関構造〉と〈類一種一個の三一的交互的媒介〉との関連が、すなわち、木村の思考図式・論理構造と田邊元の〈種〉の論理との関連が、より詳細に解明されるべきである。さらに、「表現」が具体的に「表現愛」と規定される理由の十全な解明がなされるべきであり、木村の教育論に即して「生命論的パラダイム」と「実体・属性パラダイム」とを「裁断」するのではなく、両者の「相関」のありようの解明がめざされるべきである。最後に、木村における教育実践と教育理論構成との関連の在り方などについても、十分な批判的解明がなされるべきである。まとめていえば、木村の理論構築の位置づけられるべき文脈が、たんに木村理論のみに焦点づけた個別研究の域を超えて、広く共時的かつ通時的にたどられるべきである。

しかし、これらの課題は、本研究による木村理論の包括的で徹底的な把握を前提として、はじめて設定可能となった。この課題群の出現は、本研究の欠陥を示すものなどではなく、行き届いた目配りをもって遂行された本研究に、事後的にみいだされる将来的諸課題であるにとどまる。したがって、これらは、本研究の博士学位論文としての価値をいささかも減ずるものではない。

よって、本論文は、博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成23年1月6日、論文内容とそれに関連した試問を行った結果、合格と認めた。

論文内容の要旨及び審査の結果の要旨は、本学学術情報リポジトリに掲載し、公表とする。特許申請、雑誌掲載等の関係により、学位授与後即日公表することに支障がある場合は、以下に公表可能とする日付を記入すること。

要旨公開可能日： 年 月 日以降